

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析 —カリカチュアから悲劇への転換—

渡 邊 浩

Abstract In Conrad's political stories, the author tries to emphasize several common elements in order to express irony and criticism. Conrad published two short terrorism-related stories, 'An Anarchist' (1906) and 'The Informer' (1906), in *Harper's Magazine*, and these short stories were later included in *A Set of Six* (1908). These were the first of his short stories to include anarchism or terrorism as main themes. These stories had a deep influence on the following long political stories, *The Secret Agent* (1907) and *Under Western Eyes* (1911). First of all, the main character Paul in 'An Anarchist' reminds readers of Razumov in *Under Western Eyes*, if we compare their fate and the structures of the stories. Moreover, in the case of 'The Informer', the protagonist, Sevrin, also shares some common characteristics with Razumov concerning his way of life and thinking. In addition, these short stories show some elements of caricature which Conrad often invokes when he uses irony and criticism to show his feelings of hostility and hatred. In the case of Razumov, however, there is almost no caricature, and, on the contrary, a strong tragic personality is realized in him. The focus of this paper is a comparative analysis of the short stories and *Under Western Eyes*, including their protagonists and plot composition. Special emphasis will be placed on the influence of the short stories on the latter story, and how the elements of caricature are transformed in tragic ways; especially in regard to Razumov.

1. はじめに

コンラッドはテロリズムにまつわる悲劇的な長編作品『西欧の眼の下に』(*Under Western Eyes*, 1911) (以後『西欧』と略記)に先立ち、短編作品「無政府主義者」('An Anarchist', 1906)と「密告者」('The Informer', 1906)を *Harper's Magazine* に発表し、これらの短編は後に 1908 年出版の短編集 *A*

Set of Six に収められている。『西欧』における主人公ラズーモフ(Razumov)に注目してみると、「無政府主義者」に登場するポール(Paul)は、その生き方の描写に関して、ラズーモフを彷彿させる部分があり、またこれらの短編には、全体的に人物描写と物語の展開にカリカチュアを感じさせる要素も含まれていることがわかる。また「密告者」に登場するセヴリン(Sevrin)ともいくつかの共通点があり、また作品の構成と描写に関しても似通った点が見出される。この論考では、上記の短編「無政府主義者」と「密告者」、並びに『西欧』とを比較分析し、前者の人物描写とプロット構成が、後者にどのようなモチーフとなり影響を与えているのか、またカリカチュア的要素がどのように悲劇の構成に転換されているのかという点について、ラズーモフというペルソナを中心に考察する。

2. 作品の類似性と影響

「無政府主義者」と「密告者」に関してはコンラッドが初めてアナキストを扱った作品である。そしてこの後しばらくして執筆された長編『密偵』(*The Secret Agent*, 1907)と『西欧』にもアナキストが登場するが、上記の短編がその物語とキャラクター構成に影響を与えていることは確かである。¹

特に今回注目する長編『西欧』に関しては、主人公ラズーモフの創造にあたって、二つの短編の主人公、まず「無政府主義者」に登場するポールと次に「密告者」に登場するセヴリンが大きく関与している部分が見出せる。この点に関して詳しく言及している先行研究が見られないので、ポールとセヴリン、そしてラズーモフのキャラクター分析と比較研究を行うことは有意義であると考えられる。

まず二つの短編のプロットを確認する。「無政府主義者」は作家が初めてアナキズムを扱った作品であり、舞台は南米の北東部に位置するフランス領ギニア(*Guyane*)である。そこは元来フランスの流刑地として扱われていた地域である。パリに住むポール(Paul)という名の真面目で平凡な機械工が、自分の誕生日パーティーの最中にレストランで騒ぎを起こし、無政府主義者に間違われ、逮捕されることになる。その挙句に職と住処を失い、本当のアナキスト仲間頼らざるを得ない生活に陥ることになる。労働者

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

のための活動という美名のもとに銀行強盗まで犯してしまい、最後に流刑地のギニアに流されるのであるが、脱獄騒ぎの中で、以前のアナキスト仲間、シモン（Simon）とマフィル（Mafile）に偶然出くわすことになる。ポールにとってアナキストとアナキズムは、自分の人生をダメにしたものという恨みしかない。たまたま持ち合わせていたピストルで二人を脅し脱獄用の船を漕がせ、最後はアナキズムという運命の手から逃れるように彼等を殺害してしまう。しかし運よくそこに通りかかった貨物船に拾われて、近くの農場の管理人ハリー・ジー（Harry Gee）にかくまわれ、その片隅でひっそりと隠れるように人生をおくっているという概略である。

この物語はたまたま蝶の採集にその農場に来ていた「私」（‘I’）が、その管理人にポールの話聞き、それから彼に実際に会うことによって内容が語られる形式をとっている。しかし自分が逃亡者であるという弱みを握られているポールは、半ば奴隷のようにこき使われ、惨めで孤独な生活を送っているのである。自分の小市民的な幸せしか願っていなかったポールが突然アナキズムのトラブルに巻き込まれ人生の軌道を狂わせる点は、国と立場は異なるが、『西欧』におけるラズーモフの人生を深く連想させるものがある。

その数ヵ月後に執筆されたもう一つの短編「密告者」は、語り手の「私」（‘I’）が、友人からアナキストの X 氏（Mr. X）を紹介されることから物語が始まる。X 氏は骨董収集家として著名であったが、その裏では知る人ぞ知るアナキストとして活躍し、また著述活動も広範囲に行っていた。そしてロンドンで起こったテロ事件を私に話すことになる。彼は、ハーマイオニ街（Hermione Street）という架空の一角で発生したテロ事件に言及するが、ことの発端は、X 氏がかかわったテロ事件がことごとく事前に警察側に伝わったことにより、内部に密告者がいるのではないかと疑いが生じた経緯を説明する。そこで X 氏らは仲間のアナキストたちと偽警官になって味方のアジトにわざと踏み込み、裏切り物の正体を暴くという作戦を実行することになる。政府高官の娘がアナキストたちのパトロンになっているお膳立てなどは、確かに金持ちの老婦人がパトロンとして登場する『密偵』にも共通する要素であり、教授（Professor）と呼ばれる理工系の学生あがりの人物が爆弾製造に携わる点は、『密偵』の中でやはり教授（Professor）

とあだ名を付けられているテロリストと共通する人物設定となっている。しかしテロリストの中で中心的な役割を果たしていたセヴリンが、最も信頼されていたにも関わらず、裏切り者の密告者であったという結末は、娘との恋愛沙汰を含めて考えて、明らかに『西欧』におけるラズーモフを連想させる要素が強いと言える。物語の最後の方でセヴリンは偽の家宅捜索と気付かずに、娘を逃がそうと官憲のスパイである自分の正体を偽警官たちに暴露してしまう。そして仲間たちの非難と嘲笑の中、自分の行為は「信念に基づいて行ったものである」と宣言する。

“Don't be a fool, Horne,” he began. “You know very well that I have done this for none of the reasons you are throwing at me.” And in a moment he became outwardly as steady as a rock under the other’s lurid stare. “I have been thwarting, deceiving, and betraying you—from conviction.”

“He turned his back on Horne, and addressing the girl, repeated the words: ‘From conviction.’ (A Set of Six, 97 イタリアック筆者)

この部分に対応する『西欧』の場面は、ラズーモフが日記の中でナタリー(Nathalie)に愛を告白する部分であろう。

Pardon my presumption. But there was that in your glances which seemed to tell me that you . . . Your light! your truth! I felt that I must tell you that I had ended by loving you. And to tell you that I must first confess. Confess, go out—and perish. (UWE, 361)

セヴリンの告白は、高官の娘への自己弁護に終始しているように響くが、ラズーモフの場合は、ナタリーへの愛と彼女の純心さをはっきりと認めるのである。作家はこの作品の細かい部分の要所に、単なる場面説明ではない複雑な心理描写を組み込んでいることが理解できる。

この二つの短編は明らかにその後の長編『密偵』と『西欧』に対して、いくつかの人物設定とストーリー展開に影響を与えていることは間違いないと思われる。しかし、詳しく検討してみると、その影響の仕方に明らかに相違がある。すなわち『密偵』に関しては先程も述べた通り、教授と呼

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

ばれる人物が登場し、また女性のパトロンが登場する部分など、人物設定の面では確かにモチーフになっている要素が発見できる。またアナキストたちの描き方に関しても、コンラッドの視点は始めから愚かな連中とみなす軽蔑的に描くカリカチュアが感じられる。ポールに対しては事件に巻き込まれた悲劇的な要素も描かれているが、むしろ無責任なアナキストに利用された彼の愚かさが強調されている。また『密偵』の主人公である風采の上がらないテロリスト、バーロック (Verloc) にも同様なカリカチュアが感じられる。したがって部分的な人物の設定に関しては『密偵』に影響を与え、またアナキズムを告発するためにわざと登場人物たちの愚かさを強調する、カリカチュアとしての描写に共通点が見出せる。²

3. 「無政府主義者」との関係性

『西欧』に関しては、主人公ラズーモフの設定と描き方に、上記の短編のカリカチュアとは異なる、根本的な影響関係が見出せるのである。まず「無政府主義者」の主人公ポールに関しては、先ほど紹介した通り政治的な野心など全くないごく真面目な小市民の機械工であった。その彼が、誕生日を祝ってくれる仲間と開いたパーティーでとことん酔ってしまう。そしてそこにいあわせた無政府主義者の挑発的な言葉によって「無政府主義者万歳！くたばれ資本家」(‘*Vive l’anarchie! Death to the capitalists!*’) (*A Set of Six*, 147)と叫ぶのである。酔って店の中で騒いでいたポールは官憲に逮捕されるが、運悪いことに社会主義者の弁護士によって無政府主義者の英雄に祭り上げられることになる。そのようにして予想外の展開となり、行き場をなくしたポールは無政府主義者の仲間に頼らざるを得なくなる。

このような展開は、まさにラズーモフの運命と似通っていると言える。彼の場合も立場と背景は異なるが、小市民的な幸せのみを求めるロシアのサンクトペテルブルグ(St. Petersburg)の学生であった。そして政府機関における地道な出世のみを願うごく当たり前の市民でもあった。

Razumov was one of those men who, living in a period of mental and political unrest, keep an instinctive hold on normal, practical, everyday life. He was aware of the emotional tension of his time; he even responded to it in an indefinite way.

But his main concern was with his work, his studies, and with his own future.

Officially and in fact without a family (for the daughter of the Archpriest had long been dead), no home influences had shaped his opinions or his feelings. *He was as lonely in the world as a man swimming in the deep sea. The word Razumov was the mere label of a solitary individuality.* There were no Razumovs belonging to him anywhere. (*UWE*, 10 イタリアック筆者)

ごく当たり前の青年をしっかりと演出することにより、彼が貶められてゆく落差が強調され、その不幸の根源を追及するプロットになっている。上述の通りこの状況は「無政府主義者」と重なるわけであるが、ラズーモフの描写はその平凡さや孤独感の強調にしても入念に描かれている。この作品においてコンラッドは 19 世紀末のロシアの専制主義を告発しようとしていたのである。作家の「覚書」(‘Author’s Note’) からの一節には以下の記載がある。

The various figures playing their part in the story also owe their existence to no special experience but to the general knowledge of the condition of Russia and of the moral and emotional reactions of the Russian temperament to the pressure of tyrannical lawlessness, which, in general human terms, could be reduced to the formula of senseless desperation provoked by senseless tyranny. What I was concerned with mainly was the aspect, the character, and the fate of the individuals as they appeared to the Western Eyes of the old teacher of languages. (‘Author’s Note’ to *UWE*, viii)

無政府主義者の仲間とみなされたラズーモフは、政府高官の暗殺を行ったハルディン(Haldin)にかくまってくれるように頼まれる。それが図らずもテロリズムに巻き込まれ運命を狂わされる発端となる。

ポールに関しても、ふとした些細な出来事で、真面目な青年が人生を狂わされる展開は同じである。彼はフランス出身で流刑地の南米ギアナに流されるという運命をたどり、ラズーモフの場合は祖国ロシアからジュネーヴ(Geneva)に赴くことになる。場所と国情は異なるが、アナキズムに関わり、運命に押し流されるプロセスは似通っているといえよう。

話し手の「私」に出会ったときポールは、大手食品会社の経営する牧場

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

で半ば奴隷のように拘束され搾取されていた。彼を資本主義による一種の犠牲者とする解釈が成り立つが、それに対してラズーモフの場合はロシアの専制政治の犠牲者として描かれている。いずれにせよ両者ともに政治や社会体制の犠牲者であることにはちがいない。ホランダー (Rachel Hollander) はラズーモフの生い立ちと、彼が自分を国家の一部と考える必然性、また反体制に対する嫌悪と恐怖を指摘している。

Razumov's resistance to Haldin's specific request and his revolutionary cause can be understood in light of Razumov's fractured relationship to time and familial origins. Having defined himself as the offspring of the nation, Razumov cannot imagine a destiny that would pit individual freedom against society's interest in conformity. (Hollander, 7)

物語の中でラズーモフは、身寄りのない孤児、国家体制しか知らない学生として登場する。また、ポールも友人が殆どいない孤独な青年として描かれている。

もう一つの類似点としては、二人とも歪められた運命から逃れようと試みる部分である。ポールは流刑地の島カイエンヌ (Cayenne) から脱獄騒ぎに紛れて彼を無政府主義に引き込んだ二人とボートで逃走するが、二人を殺さない限り自分は永久にそこから逃れられないという幻想に陥り、二人をピストルで射殺するという結末を迎える。そして南米の農場で孤独な生活を送ることになる。

Why could they not have left me alone after I came out of prison? I looked at them and thought that while they lived I could never be free. Never. Neither I nor others like me with warm hearts and weak heads. For I know I have not a strong head, monsieur. A black rage came upon me—the rage of extreme intoxication—but not against the injustice of society. Oh, no!

“‘I must be free!’ I cried, furiously. (*A Set of Six*, 158-59)

またラズーモフの場合は、先程も述べた通り、専制政治の権力から逃れるために、自らがそのスパイであったことを告白し、アナキストの暴力を受

けて聴覚を失う結末を迎える。そしてロシアの片田舎で半ば隠棲した状況で余生を送るという展開が示される。「私」はラズーモフの告白後の経緯を偶々再会した女性革命家のソフィア・アントノヴナ (Sophia Antonovna) から聞き出すことになる。彼女はラズーモフに関して、自らの恥辱をはらすために賢明な行動をとったと評価するのである。

It was just when he believed himself safe and more—ininitely more—when the possibility of being loved by that admirable girl first dawned upon him, that he discovered that his bitterest railings, the worst wickedness, the devil work of his hate and pride, could never cover up the ignominy of the existence before him. There's character in such a discovery. (*UWE*, 380)

彼女により克明にラズーモフの心境は分析され、彼の決断が最終的に彼の魂の救済につながったと結論付ける。それに対して「無政府主義者」の最後の場面では「私」がポールのことをあくまでも哀れな隠棲者として描いている。

Sometimes I think of him lying open-eyed on his horseman's gear in the low shed full of tools and scraps of iron—the anarchist slave of the Maranon estate, waiting with resignation for that sleep which "fled" from him, as he used to say, in such an unaccountable manner. (*A Set of Six*, 161)

ポールはその愚かさゆえに自分の運命に翻弄された、ある意味では自虐的なカリカチュアとして描かれているのである。

このようなプロットの展開は、偶然の出来事により運命を狂わされた主人公たちが、その犠牲者となり、最終的に世の中に背を向けた生き方に落ち着くという共通点を示している。しかし大きな違いは、「無政府主義者」の中で作家コンラッドの視点は、アナキズムやアナキストたちに対して終始冷淡で軽蔑的な眼を向けていることである。そこには同情の気配がうすく、また主人公ポールに関しても、アナキストに利用された哀れな若者としての印象が強調されている。³ しかしラズーモフの場合は作家が彼を愚か者としてまた、単なる権力者の手先として描こうとしている意図は殆ど

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

感じられることはない。むしろ作品の主眼はコンラッドも敵意を抱いていたロシアの専制政治とツァーリズムであり、その犠牲者としてラズーモフが描かれており、また作家と読者の同情もラズーモフに注がれることになる。ホルンダーはまた次のように指摘している。

Under Western Eyes, published six years after “Autocracy and War,” is similarly pessimistic about the potential for substantive political improvement in Russia. Despite a brief moment of hope in response to the creation of the first parliament in 1905, Conrad quickly reverted to his bleak assessment of Russia’s political potential. The Author’s Note written for a new edition of the novel in 1920 confirms that Conrad saw little hope for the 1917 revolution. (Hollander, 5)

ポールとラズーモフ、二人の主人公の生き方にはかなり多くの共通点が見出され、作家の告発しようとした意図は異なるものの、お互いの人物像の影響関係を感じさせる部分は大きい。しかし「無政府主義者」の場合はいくまでもアナキズムの告発であるのに対し、『西欧』では非難の対象はロシアの専制政治に向けられているのである。そしてロシアの政治的改革に関して作家は上記のように否定的である。

4. 「密告者」との関連性

次に「密告者」の分析を行いたい。この作品に関しては、語り手の私が、たまたま知り合ったアナキストの X 氏から、ことの顛末を聞くという性質上、ストーリー展開が概略的にならざるを得ない部分がある。しかし広く知られたアナキストである X 氏の描写にしても、初めからコンラッドがアナキストに対してデフォルメを加え嘲笑的に描写している様子は明らかである。この点に関しては『密偵』のアナキストたちの描写に近いと言えよう。⁴

X 氏は骨董が趣味で、貴族然とした様子でありながらアナキストの黒幕といった描写はかなりの誇張があり、作家が告発し非難する対象に関するデフォルメがありカリカチュアがあるとみなしても差支えないであろう。X 氏の贅沢な暮らしを揶揄する「私」に対して、彼はアナキストからびた

一文の金も受け取ったことはなく、金は自分の著作により飽食のブルジョワたちから得られたものだと言張する。つまり時間を持て余し、退屈にも飽きたブルジョワたちはテロ騒ぎが起きることを期待し楽しみにしており、中にはそのパトロンになろうとするものもいると説明するのである。

Its own life being all a matter of pose and gesture, it is unable to realize the power and the danger of a real movement and of words that have no sham meaning. It is all fun and sentiment. It is sufficient, for instance, to point out the attitude of the old French aristocracy towards the philosophers whose words were preparing the Great Revolution. (*A Set of Six*, 78)

このようにX氏は、フランス革命やその思想家を支持した貴族にも言及し、揶揄している。その話の成り行きで、政府高官の娘がパトロンになっていたアナキストたちの事件が紹介される。ロンドンのハーマイオニ街にある政府高官の屋敷でその娘と弟によってアナキストたちがかくまわれ、彼らがテロ活動を画策していた経緯が語られる。この作品のもう一つの特徴は、その若い娘と中心的なテロリスト、セヴリンとの恋愛関係である。X氏に言わせると娘がアナキストをかくまい、またその思想に興味を抱いたのもファッションに近いようなジェスチャーであったと評するのである。彼女は政府高官の娘でありながら、市民の味方であり、インテリの仲間であるというジェスチャーを巧みに身に付けており、自己満足している状況であると分析する。

She went to a great length. She had acquired all the appropriate gestures of revolutionary convictions—the gestures of pity, of anger, of indignation against the anti-humanitarian vices of the social class to which she belonged herself. (*A Set of Six*, 81)

この娘の描写と、『西欧』に登場するハルディンの妹ナタリーとは全く性格が異なるように見える。確かにナタリーは純粋に家族を思う女性であり、政治的な野心はそれほど強く描かれてはいない。最後の場面になると祖国の明るい復興を夢見てはいるが、それは政治的野心というよりも祖国愛と

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

呼ぶべきものである。

“I must own to you that I shall never give up looking forward to the day when all discord shall be silenced. Try to imagine its dawn! The tempest of blows and of execrations is over; all is still; the new sun is rising, and the weary men united at last, taking count in their conscience of the ended contest, feel saddened by their victory, because so many ideas have perished for the triumph of one, so many beliefs have abandoned them without support. They feel alone on the earth and gather close together. Yes, there must be many bitter hours! But at last the anguish of hearts shall be extinguished in love.” (*UWE*, 376-77)

一方、政府高官の娘は個人的な政治活動による自己満足が、彼女の行動の動機として描かれている。そしてそのような行為そのものが自分の憧れに対するジェスチャーとしてとらえられている点が、ナタリーとは全く異なっているといえるのである。

どのような文学作品にしても相応の誇張などは見られるはずであるが、「密告者」に関しては、アナキストに関する誇張はとくに顕著に見受けられる。政府高官の娘もさることながら、版画とエッチングの天才と称されるテロリスト、ホーン（*Horne*）などもかなりの誇張が感じられる。そうした意味でカリカチュアとしての描写を意図した場合と、真実を描く場合とでは、確かに似通った人物やプロットでも大きく印象が異なってくる。

「密告者」における『西欧』との類似点は、先ほども述べた通り、アナキスト仲間を裏切るセヴリンという人物と、政府高官の娘との恋愛劇、そして最終的に自分の正体が暴露されて仲間から非難され自滅するセヴリンの顛末などがあげられる。しかし「密告者」においては、彼がなぜアナキスト仲間を裏切ったのか、その経緯は語られていない。ただ彼が、「信念に基づいてやった」と打ち明けるだけである。また形はどうあれ、セヴリンは相手の高官の娘に対して恋愛感情を抱き、彼女を偽の警官のガサ入れから救いたい一心で自分がスパイであることを暴露してしまう。この点はナタリーに対する思いから自分がスパイであることを告白し、権力と手を切ることを決意したラズーモフの経緯とよく似ているのである。また性格は異なっても主人公を魅了してゆく高官の娘とナタリーは、主人公にと

って非常に魅力的な女性として描かれている。そしてラズーモフは自分の正体を暴露した後に、テロリストの一味であった残忍な殺し屋のニキータ (Nikita) に制裁を受け聴力を失う結末になる。この場面は「密告者」の最後の方でセヴリンが、アナキスト仲間ホーンに憎悪の言葉を浴びせられ、服毒する場面に通じている。

さらに決定的な部分は、セヴリンが日記をつけていたという事実である。セヴリンが自殺を遂げた後、X氏とホーンはセヴリンの下宿に赴き遺品の調査を行うことになる。その時に彼が付けていた日記を発見し、彼の思想的・感情的な変遷を確認するという経緯が描かれている。

We forced open a couple of drawers in the way of duty, and found a little useful information. *The most interesting part was his diary; for this man, engaged in such deadly work, had the weakness to keep a record of the most damning kind. There were his acts and also his thoughts laid bare to us. But the dead don't mind that. They don't mind anything.* (*A Set of Six*, 100 イタリアック筆者)

『西欧』における物語展開では、イギリス人の語学教師である「私」(‘I’)が、最終的にナタリーから預かったラズーモフの日記に基づいて、彼にまつわるストーリーを回想的に語るという筋書きになっている。したがって、「密告者」の筋書が『西欧』に影響を与えていることはかなり明白ではないかと考えられるのである。しかしあくまでも「密告者」のX氏がセヴリンに与える評価は手厳しく軽蔑的である。

“‘From conviction.’ Yes. A vague but ardent humanitarianism had urged him in his first youth into the bitterest extremity of negation and revolt. Afterwards his optimism flinched. He doubted and became lost. You have heard of converted atheists. These turn often into dangerous fanatics, but the soul remains the same. After he had got acquainted with the girl, there are to be met in that diary of his very queer politico-amorous rhapsodies. (*A Set of Six*, 100)

セヴリンの日記には「いかれたような、政治と恋愛の戯言」(‘very queer politico-amorous rhapsodies’) が書かれていたと嘲笑的に語るのである。

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

以上のことを考え合わせると、ラズーモフという人物の創造にあたっては上記の二つの短編はかなり発想的に大きな影響を与えていると考えて差支えないと思われる。小市民的な幸せしか望んでなかった青年が、テロリズムの事件に巻き込まれ、本来の人生設計を狂わされる。そこで権力に利用されて、スパイとしての活動を行い、最終的に信頼させたアナキストたちを裏切るのであるが、女性の影響によって自分の良心に立ち返り事実を告白するという経緯は、まさに二つの短編を折衷させたような展開と言える。『西欧』の中で唯一強いカリカチュアの対象となっている女性は、ジュネーヴでテロリストたちのパトロンを気取っているマダム・ド・S (Madame de S—) である。

For my own part, I was pleased to discover in it one more obstacle to intimacy with Madame de S—. *I had a positive abhorrence for the painted, bedizened, dead-faced, glassy-eyed Egeria of Peter Ivanovitch.* I do not know what was her attitude to the unseen, but I know that in the affairs of this world she was avaricious, greedy, and unscrupulous. (UWE, 161 イタリアック筆者)

彼女は特にピョートル (Peter Ivanovitch) との関わりが深く、双方ともに自己顕示欲の強い人間味のない人物として描かれているところを見ると、コンラッドによるカリカチュアの意図と手法がはっきりと生かされている人物といえよう。

『西欧』に関しては、ラズーモフは決してカリカチュアの対象にはなっていない。その理由は、テロリズムに対する告発がこの作品のテーマではないからである。先ほども述べた通り、この作品の主眼はロシアの専制主義に対する告発にある。周知の通り祖国ポーランドを蹂躪したロシアに対する作家の嫌悪は根強いものがあるが、その告発のために、ラズーモフは国家体制の犠牲者、悲劇の主人公になる必要があったのである。

5. 結び

‘Author’s Note’の中でコンラッドは、物語の最初の部分を脱稿した時点では、ハルディン、ラズーモフ、ミクーリン (Mikulín) の三人の人物像以外

はっきりした構想はできていなかったと述べている。⁵つまりハルディンはアナキストであり、ラズーモフは主人公、そしてミクーリンはロシアの警察組織の高官という設定である。この三人の設定を考えると、政治権力とアナキズムの板挟みとなる犠牲者ラズーモフの立場は、当初からはっきりとしている。もしくはそれしか専制政治の在り方を告発する図式はあり得ないことが理解できる。そしてその専制政治の残酷さとロシアの荒涼とした風土や国民性を告発するには、作家は真摯に実情を観察し、また忌憚なく描写する態度が必要であった。この点を強調する部分が、また‘Note’の中に見出せる。

The course of action need not be explained. It has suggested itself more as a matter of feeling than a matter of thinking. It is the result not of a special experience but of general knowledge, fortified by earnest meditation. My greatest anxiety was in being able to strike and sustain the note of scrupulous impartiality. The obligation of absolute fairness was imposed on me historically and hereditarily, by the peculiar experience of race and family, in addition to my primary conviction that truth alone is the justification of any fiction which makes the least claim to the quality of art or may hope to take its place in the culture of men and women of its time. (‘Author’s Note’ to *UWE*, viii)

その主人公の悲劇性を描くにあたっては作家が嫌っていた二つの要素を結びつける筋書が浮かんだとしても不思議ではない。すなわち専制主義とアナキズムの両方の板挟みにあう主人公の苦悩と悲劇性である。平凡で真面目に生きようとする孤児の学生であったラズーモフ、勉学の努力による社会的な栄達のみを願っていた彼が、テロリスト学生のハルディンに同志と勘違いされ、内大臣暗殺を犯した彼をかくまってくれるように依頼される。そしてテロリストにより人生の歯車が狂わされる。この筋書きは「無政府主義者」のポール運命とほぼ似通っていると言える。しかしそこには等身大の青年の姿と苦悩が描かれ、カリカチュアの要素は見られない。むしろ体制側の人物であるミクーリンや、ラズーモフの唯一の後見人であり実父であることも暗示されている老貴族 K 公爵などに誇張した表現が用いられ、一種のカリカチュアと感じられる部分が存在する。このようにしてコ

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

ンラッドは非難する相手や要素に対して主にカリカチュアの手法を用いていることが理解できる。

「密告者」においては主人公セヴリンが、一度はアナキズムに身を投じながらも結局仲間を裏切る結末に至った経緯は殆ど描かれていない。しかしこのラズーモフの前半の生き方は、セヴリンの語られていない前半生を連想させるものがある。そしてジュネーヴにやってきたラズーモフがハルディンの美しい妹ナタリーと偶然出会うことにより自らの価値観に疑問を抱き、良心に立ち返り人間的な生き方に目覚めるという経緯をたどる。これはセヴリンが高官の娘に魅せられて彼女を助けるために自分の正体を暴露してしまうプロットに重なることになる。しかしあくまでもラズーモフはカリカチュアの対象にはならない。彼がリアルな悲劇の主人公になればなるほど、彼を不幸な境涯に陥れたロシアの専制政治に対する強い告発になるからである。またおしなべてアナキストやテロリズムに対して冷淡で軽蔑的なスタンスを取っているコンラッドにしては、『西欧』においては、必ずしもアナキストたちを軽蔑的に扱ってはいないのである。たとえば女性アナキストのソフィア・アントノヴナなどに関しては不当な権力に立ち向かう勇敢な闘士として描かれている場面もあり、この物語においては、アナキストたちはロシアの専制政治に立ち向かう意義付けが与えられているのである。このようにしてコンラッドの攻撃の対象はあくまでもロシアの政治権力に向けられていることがはっきりと理解できる。

ラズーモフという人物象を分析してみると、コンラッドが永年温めてきたロシアの専制政治の告発を目的とした長編を描くにあたって、いきなり悲劇の主人公を考え出したと想定するよりも、それ以前にアナキストとテロリズムに関わる二つの短編の主人公ポールとセヴリンの存在が深く影響していると推察する方が素直な道筋となり、また奇妙につじつまが合うのである。そして上記の短編に関しては、明らかにアナキストに対する攻撃の矛先が向けられているため、それに関わる人物たちはカリカチュアの要素を有するが、ラズーモフは等身大の悲劇の主人公として描かれている。そしてむしろ彼を取り巻く権力者たちの中にカリカチュアが現れているのである。

注

*本稿は2017年3月4日、日本大学歯学部で開催された「英米文化学会 第152回例会」における研究発表「『西欧人の眼の下に』におけるキャラクター分析—カリカチュアから悲劇へ—」の原稿に加筆訂正を行ったものである。

- ¹ ブロス(Addison Bross)は *A Set of Six* に収められている短編「ガスパール・ルイス」(‘Gaspar Ruiz’, 1906) と「無政府主義者」を比較して、対立する二極の中で翻弄される主人公を指摘し、その状況を『西欧』の先駆け的作品と位置付けている。

Like Gaspar Ruiz, the central character of ‘An Anarchist’ is forced into a role foreign to his own nature by the adherents of two opposing fanaticisms equally lacking in integrity. As such these two stories are forerunners of Conrad’s longer study of the same situation in *Under Western Eyes*. (109)

しかし「無政府主義者」のプロットはその始まりと展開、そしてポールの孤独という点において圧倒的に『西欧』に近いと言えよう。

- ² 「カリカチュア」(‘caricature’) に関する一般的な定義は以下の通りである。

Caricature is the distorted presentation of a person, type or action. Commonly a salient feature is seized upon and exaggerated, or features or members of animals, birds or vegetables are substituted for parts of the human being, or analogy is made to animal actions. Generally we think of caricature as being drawn in line and meant for publication to people to whom the original is known; the personal trait is usually present. (*Encyclopedia Britannica*)

カリカチュアについては、「人物の性格や特徴を際立たせるために(しばしばグロテスクな)誇張や歪曲を施した人物表現」であることには間違いない。滑稽や風刺の効果を狙って特に人物の性格や特徴を際立たせる描写と解釈してよいと考えられる。『密偵』や「密告者」におけるテロリストに関してはグロテスクという表現が当てはまる描写がなされ、その特徴は『西欧』においても生かされている。コンラッドが嫌うタイプのテロリストや権力者たちにはこうした描写がしばしば用いられている。

- ³ カスパートソン(Gibert M. Cuthbertson)はコンラッド作品に描かれる‘absurdity’に注目し、その要素によって生じるアイロニーや批判の眼を指摘する。

He destroys two convicts who escape with him, laughing absurdly as he draws his revolver. He ends up on the great B. O. S. estancia where he vegetates in his absurd

二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析

illusion of freedom. The Company spends nothing on him, but 50,000 pounds a year on promotion of its products. Freedom leads to destruction of his fellow men and dehumanization of himself. The type of freedom which Anarchist obtains is a reduction to conceptual absurdity. (102-03)

ポールの得ようとした「自由」が結局馬鹿げた破滅へと通じることを示している。

- 4 カスパートソンはまた「密告者」における X 氏の描写に関して、人物と背景に関する作家の意図的な誇張や配置があることを述べ、物語全体にもそのような誇張が存在することを指摘する。

In the story there is a fine interplay of absurd character and situation. For example, there is the unlikely connoisseur of bronzes and chinoiserie, who is also purportedly the 'greatest rebel (revolte) of modern times.' How can an anarchist be anything but a proverbial bull in such a china shop? (102)

- 5 'Author's Note'の中で、作家は最初の部分を書き終えた時点で、ようやく物語全体の世界が浮かび上がってきた旨を記している。この内容を見るとやはり、作家の脳裏には当初から権力と反体制の力関係の中で苦しむ主人公の構図はできていたことがわかる。

As to the actual creation I may say that when I began to write I had a distinct conception of the first part only, with the three figures of Haldin, Razumov, and Councillor Mikulin, defined exactly in my mind. It was only after I had finished writing the first part that the whole story revealed itself to me in its tragic character and in the march of its events as unavoidable and sufficiently ample in its outline to give free play to my creative instinct and to the dramatic possibilities of the subject. ('Author's Note' to *UWE*, vii)

参考文献

Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenheld and Nicolson, 1960.

Batchelor, John. *The Life of Josph Conrad*. Oxford: Blackwell, 1994.

Bross, Addison. "A Set of Six: Variations on a Theme." *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol.3. Mountfield: Helm Information, 1992. 105-21.

Collits, Terry. *Postcolonial Conrad: Paradoxes of Empire*. 2005. London: Routledge, 2006.

- Conrad, Joseph. *Almayer's Folly*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 1. London: Gresham, 1925.
- . “Heart of Darkness.” The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 6. London: Gresham, 1925.
- . *Nostramo: A Tale of the Seaboard*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 8. London: Gresham, 1925.
- . *The Secret Agent: A Simple Tale*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 10. London: Gresham, 1925.
- . *A Set of Six*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 3. London: Gresham, 1925.
- . *Under Western Eyes*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 12. London: Gresham, 1925.
- Cuthbertson, Gilbert M. “Freedom, Absurdity and Destruction: The Political Theory of *A Set of Six*.” *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1992. 99-104.
- Gillon, Adam. *The Eternal Solitary: A Study of Joseph Conrad*. New York: Irvington Pub, 1960.
- GoGwilt, Christopher. *The Invention of the West: Joseph Conrad and the Double Mapping of Europe and Empire*. Stanford: Stanford UP, 1995.
- Hewitt, Douglas. *Conrad: A Reassessment*. Cambridge: Bowers and Bowers, 1952.
- Hey, Eloise Knapp. *The Political Novels of Joseph Conrad*. Chicago: U of Chicago P, 1963.
- Hollander, Rachel. “Thinking Otherwise: Ethics and Politics in Joseph Conrad's *Under Western Eyes*.” *Journal of Modern Literature*. 38.3 (2015), 1-19. Web. 2 January 2017.
- Karl, Frederick R. *A Reader's Guide of Joseph Conrad*. Rev. ed. Syracuse: Syracuse UP, 1997.
- Peters, John G. *The Cambridge Introduction to Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Said, Edward W. *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography*. 1966. New York: Columbia UP, 2008
- Watt, Ian. *Essays on Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Whittaker, Eve M. “Amy Foster and the Blindfolded Woman.” *Conradiana* 39.3 (2007): 249-72. Web. 25 January 2015.

(わたなべ ひろし 就実大学 教授)